平成１８年９月１日発行

かまにし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第２１号

わがまちの顔

偉大なる抒情詩人　髙橋　掬太郎

「酒は涙かため息か」・「ここに幸あり」・「古城」等々、世に送り出した名曲は、三千を超えるという。

髙橋掬太郎氏は北海道風蓮湖に浮ぶ春国岱の弁才泊で、明治34年4月25日出生、この弁才泊から約16kmほど西に離れた走古丹の、別海小学校の分教場へ通学した。

「梅檀は二葉より芳し」というが、当時を知る人の伝えで、飛び級する程の優秀な生徒であったと評しているところから、やはり梅檀の喩えどおりの神童であったと思われる。

同時に作曲家の飯田三郎氏も同じ分教場へ通った仲であり、掬太郎氏が東京に出てから、作詞 髙橋掬太郎、作曲 飯田三郎の同郷コンビで名曲の数々が生まれたのである。

昭和8年10月8日、蒲田に移住したが、夫人の積極的な行動に負う所、大なるものがあった。

上京してからの活動は、作詞のみならず、矢口東小学校校歌を始めとして、近隣の各小学校、中学校の校歌作詞、東矢口三丁目（旧小林町）の自治会相談役、大田区教育振興対策委員会会長等々数多くの役職を勤め、地域活性化の推進にも尽くされた。

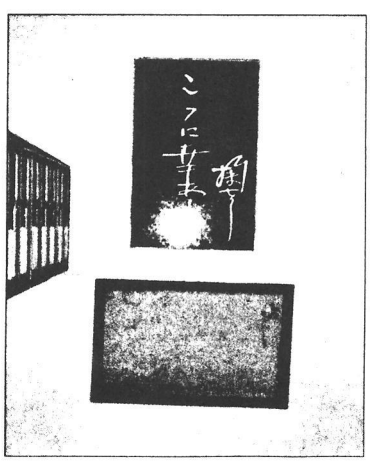
更に将来を見越して、若い作詞家を育てる為の学舎、つまり汐汐詩舎を創立、門下生は二千人を超えて、石本美由起、藤間哲郎、宮川哲夫等々多くのプロを輩出している。

「八面六臂」という言葉があるが、掬太郎氏は自分の本業である作詞の他に地域社会への貢献、後進の育成、更に音楽著作権協会理事として、長い間権利の確立のための運動を進めていたが、残念なことに著作権法の改正を見ずして、昭和45年4月9日、手厚い治療も空しく、帰らぬ人となった。享年69歳であった。皮肉にも著作権法が全面改正をされたのは4月28日のことだった。

掬太郎氏が作詞活動と同時に社会に貢献する。何故、この様な多彩な行動が出来たのか・・・。

少年期に体験した北海道の厳しさと暖かさ、そしてそこに生きる人々から知らぬうちに種をまかれた感性に、「人々とのつき合いは誠実であるべし」という掬太郎氏の信条が、偉大な作詞家、否、偉大な社会人として花開いたと見るべきであろう。

（取材　星野・髙橋委員）



入選おめでとう　道塚小学校
全国学校関係緑化コンクール

「平成17年度全国学校関係緑化コンクール」の小学校の部で入選、去る5月21日岐阜県下呂市に於ける全国植樹祭で表彰されました。学校から山本校長先生と前任の井出副校長先生が出席されました。受賞までの経緯は次の通りです。

平成13年度

校長、副校長が新たに赴任、よりよい学校にするための決意を新たにしました。手段として教育環境を改善し、教育活動の質を高めること、公共施設としての学校をきれいにすること、地域住民が身近に感じ愛着と誇りをもてる学校環境にすることとした。始めは校長、副校長が雑草、がれきの掘り起しなどを行い、それを見た地域のボランティアグループ「道塚大地の会」が協力し、作物を栽培できる畑を作る。

平成14年度

学校敷地の南西の角を花壇として使うために開墾し、道塚大地の会が協力。黒土を大量に入れ整備をする。また一部にさとうきび畑を作る。

平成15年度

学校からの呼びかけで、地域の栽培愛好者の人たちによる「道塚栽培クラブ」を結成し、代表は道塚自治会会長にお願いする。同クラブの構成メンバーは道塚自治会、道塚友愛クラブ、道塚お話会、道塚大地の会、仲よし会の5つのグループである。

全員ボランティア保険に加入し、東京都下水道局から「メトロレンガ」（焼却灰から作ったもの）千個を敷地内南西の花壇の通路に敷くなど活動を開始する。

平成16年度

「道塚栽培クラブ」の規約を作り、組織を整備する。また栽培委員会（児童会）との合同活動による花壇や畑作りなどの成果で、「道塚栽培クラブ花壇」「道塚果樹園」「水生植物園」「道塚農園」「山野草園」「ツタ園」「シダ園」「野草園」「さとうきび畑」とあわせ、9種類の植物園が整った。四季折々に多種多様な植物が花開く学校となる。

平成17年度

栽培委員会（児童会）と道塚栽培クラブの合同活動も本格的に始め、年間活動計画を作成し、ジャガイモ、キャベツ、大根、人参、えだ豆などのたね蒔きや収穫を協働で行う。試食会では大いに盛り上がる。

受賞までの経緯は以上の通りですが、山本校長先生が表彰のお礼の一文を道塚栽培クラブ宛に出されておりますので、ご紹介いたします。

新緑がまぶしい良き5月に、本校は「第五十七回全国植樹祭」において「学校環境緑化の部入選」の表彰を受けました。5月21日（日）岐阜県下呂市の南飛騨健康増進センターの特設会場にて式典があり、賞状と盾をいただいて参りました。

前任の野﨑校長先生が「地域

ぐるみで子どもを育てる」ことを学校経営方針の柱のひとつとして設定し、地域とともに緑化活動を実践されたことが大きな賞の獲得につながりました。改めて「道塚栽培クラブ」の会長花島文雄様はじめ、「道塚自治会」・「道塚友愛クラブ」・「道塚お話会」・「仲良し」・「大地の会」のお力・ご支援の大きさを感じております。

前任の井出副校長先生が皆様の活動をまとめた「平成17年度学校緑化実施状況調書」（今回の賞の審査報告書）を改めて読みますと、この5年間の取り組みは見事なものであります。

荒れ果てた土の掘り起こしから始まり、今日のように整備された本校の庭は「道塚栽培クラブ」の方々のお力の結集であります。この地域のボランティアの方々と栽培委員会の子どもたちと合同で美しい花や緑豊かな庭づくりに取り組んでこられた日々の実践が認められましたことは大変喜ばしいことであります。

皆様に教えていただきながら、五・六年生の栽培委員会の子どもたちは花を愛し、草に親しみを持ち、水やり・苗植え・収穫等に努力しています。ジャガイモの収穫やさとうきびからの黒みつ作り等、地域と子どもたちと歓声をあげ喜び合う実践をこれからも継続していきます。今後も子どもたちへのご指導をよろしくお願いいたします。

紙面ではありますが、表彰の報告とお礼の言葉とさせていただきます。本当にありがとうございました。今後もなお一層のご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

校長　山本　恵美子

学校では環境緑化のもたらす教育効果として

一、植物を育てることを通して、子どもたちに命を大事にする心を養うことができた。

二、地域と学校が栽培活動を共にすることによって、顔見知り・顔なじみの間柄ができて、町中で会って挨拶を交わせるようになった。

三、土を耕すこと、土寄せをすることなど栽培の仕方を教わることができた。また収穫の喜びや取ったばかりの作物の美味しさを実感できた。

四、道行く人が気付いて立ち止まり、時には花を話題に話がはずむ光景が見られること。

などと評価しています。

なお、学校緑化の今後の方向として、

一、地域住民と学校が協働して、顔見知り、顔なじみになり、顔の見える「安心」の町づくりに役立てる。（町の防犯効果を高める）

二、高齢者が子どもたちやほかの大人に教えることで、元気いっぱい「輝き」のある高齢者が町中に見られるようにする。（高齢者は子どもから元気をもらい、子どもは大人に見守られる）

三、緑化活動の発展として、しおりづくり・生け花など「潤い」のある生活に役立てる。

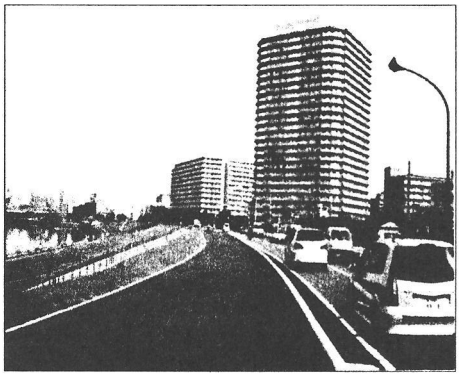
四、温暖化防止とともに、町の景観をよくして町の価値を高める。

以上、それぞれ一層の充実を目指すことです。

（取材　斉藤・幅委員）

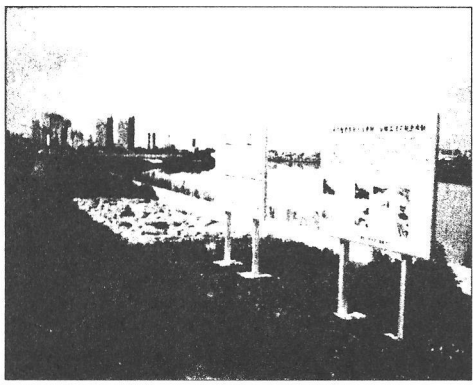
多摩川の改修工事完成

いま、多摩川の景観が大きく変わろうとしています。「かまにし17」第18号の特集で紹介した、国土交通省京浜河川事務所による多摩川の護岸工事がこのほど完成したからです。



低水護岸の強化のために、川の中央部（川崎側）に10数メートルせり出して埋め立てた分、河川敷が広がり、土手の傾斜も緩やかになったおかげで、のびのびと開放感にひたれる空間が生まれました。反対に対岸の川崎側では、岸辺が掘削、浚渫されました。交通量の多い土手上の都道は拡幅されて側道ができたため、安全性がぐんと向上しました。

ここは多摩川が大きく湾曲している部分で、かつてはたびたび氾濫を繰り返したところです。そのため、大正から昭和初期にかけて大改修工事が行われ、その結果、災害は激減しました。



そのときの工事では伝統工法が用いられ、杭出し水制と呼ばれる歴史的構築物が川の中に設置されました。

今回の工事で残念ながらこの杭出し水制は撤去され、消滅してしまいましたが、住民からの強い要望もあり、遺構があった場所に長方形に割り石が並べられて、ほんのちょっぴりですが往時をしのぶことができるようになっています。また、そのわきには解説板が設置され、水と戦ってきた地域の歴史が学べるように工夫されています。

散歩、ジョギング、サイクリングなど、私たちの地域の憩いの場として、また、地域の治水の歴史を伝える史跡としても、多くの方々に利用し、親しんでもらいたいところです。

（取材　多田委員）

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，523人
	女	27，072人
	計	56，595人
世帯		29，736世帯

平成18年8月1日現在

編集後記

わがまちの顔では往年の大作詞家、高橋掬太郎氏を取り上げました。一つの道に秀でるだけでも大変なことですが、著作権を確立し、なおかつ地域への貢献も大であった、その多岐に渡る活躍には言葉もありません。また蒲田西特別出張所管内には、本当に芸術家が多く住んでいると驚かされました。

特集では素晴らしい賞を受賞された道塚小学校を特集しました。学校だけに教育を頼りがちな風潮がありますが、学校・地域が連携し、協働した結果がこの賞に結びついたのでしょう。おめでとうございました。

投稿記事欄については、投稿がありませんでしたので、多摩川工事のその後を特集しました。馴染み深い多摩川が、もっとなじみやすくなりました。

投稿をお待ちしております。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。
事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五